

大丈夫よ！ お母さん！

教育コーディネーター 中西美沙子



(今回のテーマ)

お弁当が作る、 「絆」

子どもの頃は、たのしいことがたくさん、ありました。今の子どもたちもきっと、そうでしょうね。子どもにとって、世界は、いつも宝物のように輝いているからです。

雨や風、季節の中で変化する木々や花たち。お砂場の砂、海や山の香り。自然は子どもの偉大な友人でした。遊びもまた、たのしかった場所と時間の記憶を、子どもたちに残します。「かくれんぼ」「鬼ごっこ」「なわとび」や「木登り」などの遊びには、幼い友がいつも一緒に。夕暮れ時の「母の声」も、子どもの安心を作っていました。

子ども時代のさやかな思い出が、それからの人生をどれだけ支えるか。私は生きてきた実感の中で、確信を持って言うことができます。このような豊かな時があつてこそ、人は強く、やさしく、生きられるのだと。

子どもの頃、期待に胸が鳴ることがありました。「お弁当」を開く時です。私が幼稚園に通っていた頃は、毎日お弁当を持って行くのは、ふつうのことでした。小さなアルマイトのお弁当の

蓋(ふた)には、赤と黄色のチュウリップの花が咲いていて、母が手で縫ってくれたお弁当の袋は、可愛い花柄のものでした。

おひるにその包みを開けるのが、一番の楽しみだったのです。その頃は、今ほど食材が豊富な時代ではありませんでした。でも、お母さんたちは工夫をして、毎日、子どもが喜びそうなお弁当を作っていました。冷凍やレトルト利用ではなく、多分食材を工夫して、そしてたのしい形にして。タコやカニさんの形のウインナーソーセージが、今でも目に浮かびます。若かった母はきっと、子どものように、ふ顔を想像しながら、自分もたのしくお弁当を作ったのでしょう。

母のお得意は、卵焼きでした。卵焼きを工夫して、色々な世界をお弁当の中に展開しました。思いがけない動物があらわれたり、あつというほどきれいなお花畑がきたり。今日はどんなかな。幼い私は、ワクワクしながら、お弁当を開けたものです。

その感動が、知らず知らずの内に記憶され、私も母親になった時、自分の子どものお弁当作

りをしたのだと思います。

お弁当作り。この作業はたのしいものです。今はなにもかもが「与えられる」時代になり、スーパーやコンビニには、食材よりも出来合いの物を並べるスペースの方が広くなつてしまいましたが、でも、お弁当を作るたのしみを失くしていることに、私は少し不安を感じます。お弁当作りは、その先による「子どもがいる」ということから。

「食育」とか「知育」と、よく言われますが、個人的には余り好きな言葉ではありません。「食」が育むのは健康だけではないからです。その言葉だけでは掴みきれないものがあるのでは、と思えるのです。それは、「一番大切な「絆」ではないのでしょうか。親が食を通して、子どもの世界を想像することがなくては、健康な心は育ちません。「与える」だけでは生まれないのが「絆」なのです。

私も二人の女の子を育てました。次女は、なぜか大人びたお弁当が好きで、「何々を入れて」と、時々リクエストがありました。

ある日、この子が、学校の帰りに大きな竹の子を引きずって帰ってきたことがありました。私たちが家族が竹の子を好きなのを知っていたのでした。翌日のお弁当には早速、竹の子を炊いたものを持たせました。たのしい思い出です。その子も去年の暮れに、男の子を産みました。いつかその子が、母親の作るお弁当にどんな思いを抱くのか、たのしみでもあります。母から子へ、子から子へ、「食」を通して受け継がれるものは、慈しみではないでしょうか。

小さなお子さんを抱きたれる方々は幸福です。これから「慈(いつく)しむ(こと)」を、色々な場面で体験できるのですから。



Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

執筆・講演活動のかたわら、様々な部門の文化事業を展開する「(株)クレアシオン」の代表。文章教室「スコール」画廊「キューブ ブルー」「建築プロデュースすまい」「食彩いわさか」「ときわ薬局」など。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

☎ tel 053-456-3770

中西美沙子

検索

ピアノシモでね
中西美沙子 著

著書の「ピアノシモでね」(東京書籍)は、中日新聞に連載した人気コラム「つかまえて!」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。(税込1,500円)
※お求めは浜松市内の谷島屋で。

